

人生共樂

都築智慧藏五

第一〇部 福祉事業への取り組み

私が福祉と出会ったのは、私の人生の中でもっとも忙しかった昭和四十七年でした。当時の市議員だった加藤ヨシ子さんを中心に、主に仙台市の民生委員の方が集まって、仙台初の民間の福祉施設をつくろうという活動が起こり、宮城交通の社長をやっていた私のところにも、ぜひ発起人に加わってほしいという依頼が来たのです。発足当時は、市議員の加藤さんをはじめ、老人福祉センターの所長を務めていた熊谷太郎氏などの有志が集まって活動しており、その頃はまだ正式な「会」というものは出来ていませんでした。最初に民間の福祉施設の建設計画をもちかけたのは熊谷氏で、当時勤めていた老人福祉センターを定年退職する際に加藤さんにこの話をしたところ、興味を示してくれ一生懸命関わってくれたそうです。しかし、加藤さんは当時現役の市議員だったため直接民間の事業に関わることはできない立場でしたから、福祉にも詳しい熊谷氏が主体となって進められることになりました。加藤さんは福祉事業には非常に熱心な人で、私は加藤さんに出会ったことで福祉にめざめたといってもいいでしょう。

施設の建設に向けて、いざ活動を始めみると、私たちはさまざまな困難に直面しました。というのも、今でこそ福祉には多くの人々が関心を寄せていますが、当時はほとんどの人が福祉に無関心な時代でしたから協力してくれる人も多くはありませんでした。しかも、民間の施設を建設するためには県の認可も必要でしたから、私はメンバーたちと共に何度も県庁へ通い、認可してくれるよう陳情しました。しかし、当時民間の福祉施設を建設しても経営面で失敗する例も少

なくなかったため、資金的にも十分ではなかった私たちの事業を県ではなかなか認可してくれませんでした。

今では笑い話ですが、そんな県の態度に業を煮やした熊谷氏はある日、『認可してくれなければ、ここで腹を切る』と痰火を切ったこともありました。とにかく私たちはあきらめず、認可してくれるよう県に働きかけた結果、建設資金を一千五百万用意できたら認可する、という条件を県から提示されたのです。それから、私をはじめメンバーや私の経営しているバス会社の従業員、その他の知人はみんなで東北電力をはじめ銀行や地元の有力企業を訪問して寄付を募りました。また、民生委員のご婦人方は街頭に立ち、募金活動を行いました。しかし、私の名前を出して募金を募っていたため、福祉施設の建設に賛成し、好意を寄せて募金してくれた皆さんの気持ちを無駄にしないためにも、募金で集まったお金は施設が実現したときまで使わないようにし、私は事務局の運営に必要な費用として一〇万円を手渡しました。

こうしてなんとか資金を調達した私たちは県庁を訪れ、認可してくれるよう再び交渉しました。その結果、私たちの必死の努力の甲斐があり、ようやく県からの認可が降りたのです。しかしほっとしたのも束の間、次に私たちは施設の建設場所問題に直面しました。私たちとしては仙台市内に施設を建設したかったのですが、なかなか手頃な土地が見つかりませんでした。

そんなとき、角田市の方から桑畑三千坪を寄付しようという申し出があったのです。早速、私たちは現地の視察にでかけました。現地を訪れたところ、そこは蔵王が見える小高い丘にあり、見晴らしもよく、子供たちをあずかる環境として申し分のないところでした。しかし、設立に関する責任者となっていた熊谷太郎氏が仙台から角田まで通うのが困難なのではないかという心配

があり、彼にその旨尋ねたところ『大丈夫だ』という答えが返ってきたため、この地に建設することを決めました。

建物の建設資金は私と熊谷氏の家を抵当に入れ、県と国からそれぞれ四千二百万円を借りました。当時私は宮城交通の社長を務めていたため、施設の建設に関する一切のことは熊谷氏に任せるつもりでしたが、開園までに、実にさまざまな問題が山積みされており、私も熊谷氏同様、開園してから一年間、毎日曜日ごとに角田に通わなければなりませんでした。

角田市のみなさんには土地を提供していただいただけでなく、地元的设计士さんが無料で建物の設計をしてくれたり、施設の建設予定地に車が入れるような道路が整備されていなかったため、市が道路を拡張してくれたり、水道を引いてほしいと陳情したところ、快く工事してくれるなど、施設の建設に当たっては多大なご協力をいただきました。おそらく、こうした角田市民のみなさんの協力なしでは、はぐくみ学園は誕生しなかったことでしょう。そのため、施設の園長には当時角田市の助役の任期を終えたばかりの森清治氏に就任してもらうとともに、理事は角田市の人と仙台市の人と半々で構成しました。施設が完成したちようどこの時、富士銀行で社長が交代し、その披露に関する事業を一切やめ、福祉事業に使うということになり、全国一〇カ所の福祉施設などに総額二億円の寄付をすることが決定したのです。そして幸運にも、私たちの施設がその一〇カ所の一つに選ばれました。選出された理由は、「できたばかりの施設で資金が必要だろう」ということでした。

こうした幸運にも恵まれ昭和五三年四月一日、〈社会福祉法人恵萩会はぐくみ学園〉が誕生し、私は理事長に就任しました。学園が出来てからも、私たちはさまざまな問題にぶつかりました。

そのひとつが、職員同士の関係です。当時の職員は約四〇名ほどで、県下のさまざまなところから福祉施設などの勤務経験をもつ人を集めたため一種の“寄せ集め”的な集団になってしまい、なかなか従業員同士の関係はスムーズにいきませんでした。そのため、従業員同士がお互いを尊重しあい、気持ちよく仕事が出来るとような環境を整えるよう調整したり、従業員一人ひとりに奉仕の精神を忘れないよう徹底させることに力を注ぎました。

また、福祉施設には医療の専門家も必要だったのですが、医療のことは私たちにとっては専門外だったので当時の仙台市の医師会長堀田康哉先生（現堀田医院院長）にご指導をいただき、地元の大きな病院の院長に面倒を見てもらえるよう計らってもらいました。（現在は角田病院の院長である本多徳児氏が担当してくださっています）

『公園の中に施設を造ろう』、これが学園を造るときの私たちのテーマだったため、開園後は土地を買い足し一万五千坪（約四万九千五百平方メートル）に広げ、学園のまわりに木を植えましました。学園の建設を手掛けた当初はまわりには一本の木もなかったのですが今では何百本もの木が育ち私たちがかつて願った通りの環境になりました。学園の周辺を公園のようにしたいという私たちの思いの背後には、学園の建設が決まった当初、自分たちの住んでいる近所に福祉施設を建設されるのを嫌がった地元の人もいたため、出来るだけ違和感のないよう、施設のまわりを公園のようなイメージにしたかったのです。おかげで今では、当初私たちが願っていた公園の中に施設があるような風景になっています。

また学園内はよく整備されており、運動場や施設の中にはごみ一つ落ちていないのが自慢です。

それは、県の人たちが学園の視察に訪れたとき、『我々が来ると聞いてきれいにしたのですか』と、驚かれたくらいです。学園内が常にきれいなのは、園長である森氏が率先してゴミ拾いなどをさせていたことと、月に何回か子供たちや先生たちが清掃の日を設け、清掃に力を注いでくれたからなのです。さらに、施設ができて以来、鈴木肇氏が毎日のように子供の頭髪を無料で散髪してくれるので、園生の頭は常にきれいになっています。

運動会や盆踊り大会などさまざまなイベントが開催されている運動場は約二千坪の広さで、屋根つきの立派な舞台がある他、常に整備されていたため水はけもよく、雨が降っても水溜は出来ません。さらに、校舎に向かつてまるでみんなを見守っているかのように立派な観音様も立っているんです。年一回、「観音様祭」を行っており、私も毎年足を運んでいます。

また、ニワトリも八〇羽飼っていたので、毎日生みたてのタマゴを食べられたことに加え近くに畑を借り、新鮮な野菜など自分たちが食べるためのさまざまなものも栽培していました。私は将来は、自給自足を実現させたいと思っています。自分たちで食べるものは自分たちで作るというのも目的の一つですが、もうひとつ、施設に入っている子供たちは、何か仕事をする事によって生き生きとしてくるはずですから、彼らに一生懸命打ちこめる何かを与えてあげたいと思っていますからなのです。

はぐくみ学園は、開園から常に入居者が定員に満ちており、経営状態は安定していましたが、徐々に少年の施設にいた子供たちを親たちが自分の元から一般の学校に通わせたいという思いが強くなり、親御さんたちのそうした思いに応えるよう、学校側でも特殊学級を設けたため、施設

に入る子供が少なくなりました。そのため、他の施設は入居者が半分ぐらいになってしまったりもありませんが、はぐくみ学園は県でも施設の運営方針などを評価してくれていたため、減少することはありませんでした。

精神薄弱児施設としてスタートしたのははぐくみ学園は、満一八才になった子供は成人施設へ移らなければならぬ決りでしたが、一八才になった子供の親御さんたちからの「今まで育ててもらった施設に置いてもらえないだろうか」という声が多くなり、私たちも大人の施設として認めてもらえるよう県に陳情しました。そして平成七年四月、新たに成人施設として認められ、入居者にとっては何才までも施設にいることが出来るようになりました。

施設ができたばかりの頃は、角田市枝野小学校はぐくみ学園分教室としてスタート。その後、県立養護学校を学園内に設置し、宮城県議会に請願書を提出し、昭和四九年四月一日角田市立金津中学校はぐくみ学園分教室を新設しました。



はぐくみ学園正面玄関（慈愛 都築自筆）

そしてある程度生徒が増えてきたところで、県立養護学校に昇格。しかも、県知事が視察に訪れた際に陳情し、隣地に県立の養護学校を建設しました。

現在は、施設が一八才以上の大人の施設になってしまったため、住居部分を大人用の建物にするために従来の建物を壊し、六億かけて建設。五室ある部屋は二人用で、全室南向きの暖冷房付き。さらに、廊下は吹き抜けて暖冷房完備という、さながらマンションのような立派な建物になっています。

地元の人々の協力を得て完成した施設なので、今後は地元の人々の役立つような施設にしたいと私は考えています。そして「福祉施設」というよりは、町のみんなが気軽に使える施設にするのが私の夢なのです。

角田を「花の町」にするために、学園でさまざまな花を作り、公共施設や役場、駅、病院などに寄付しようと思っています。この計画はすでに角田市の市長、森清治園長にも宣言しており、私のこのアイディアに賛成してくれた森氏は五百万円、角田市からも百万円の寄付をいただき、その資金を元に平成八年に百坪の温室を建設しました。この温室は面積が約五五平方メートルで、アルミ材にガラスを張って建てられており、室内の温度を自動制御する装置が取り付けられている上に、設定温度を維持するために暖房が入ったり、屋根が自動的に開閉するという設備も整っている素晴らしいもので、育てるのが困難なランなどの花の栽培も可能になりました。栽培が難しい花をあえて栽培させることで、施設の子供たちに花を育てる喜びを感じてほしい、という願いもこの温室のおかげで叶いそうです。

私自身、花が好きだということもありますが、温室や花畑を作ろうと思っていた直接的なきつかけとなったのは、房総半島を旅したときに、きれいな花畑に出会ったことでした。その花畑を見たときに、こんなきれいな花畑があれば、角田市の名所になるなと思ったのです。ところがそこには、広い園内に休憩所やベンチがなく、じっくり鑑賞できなかったのです。そこで私は、好きなどころで好きなだけ花を鑑賞できるようあづまややベンチなどを設け、無料でお茶を提供するような花畑を造りたいと思ったのです。お茶を提供するのはもちろん施設の子供たちです。そうすることで施設の子供たちと人々が自然な形でふれあえる。これは施設の子供たちにとっていい社会勉強になるはずですから。

福祉との出会いは私にとって貴重な経験でした。儲けるばかりが人生じゃない、奉仕の精神があつてこそ家庭も企業も円満にいくのではないでしょう。私の人生の中で一番誇りに思えることは、社会福祉法人恵蔭会はぐくみ学園を経営し、知的障害者及びその家族を援助したこと。人間として生まれたからには、人生において何らかの形で奉仕活動をして欲しいと思っています。健康な人は体を使って奉仕活動をする、財産のある人はお金で奉仕する。今自分があるのは必ず誰かのおかげだということを経験していれば、おのずと自分も誰かのために尽くすべきだと自然と思えるはずです。私が奉仕に対するこうした考えを持ったのは、社会に出てからすぐでした。

どんなに忙しくても、奉仕ということは忘れないでほしい。それと同時に何のために人間は、自分が生まれてきたのかを考えて欲しいと思います。私は人に尽くす、世の中に尽くすことこそ、人間として生まれたことの義務だと思っています。

人生共楽

平成九年九月発行

発行／都築智慧蔵

〒964 仙台市若林区東七番丁一七二

☎〇二二―二二五―一九四七

企画・製作／株式会社千葉出版印刷

〒981 仙台市青葉区高松二丁目十一―四三

☎〇二二―二七二―一一五一
